



陸で会う佐藤さんはいつもおらかで、優しい。



1.金浦で300年以上続く掛魚(かけよ)祭り。(写真提供:にかほ市観光協会) 2.金浦港にはまるまる太った猫が多い。漁師たちが餌付けをしているのだとか。3.元文2年(1737)の海難者76名を供養した石仏。

女人禁制の海へ

今月の主役、松宝丸の船頭・佐藤正勝さん(49)に「女性は船に乗せられない」と告げられた。弁天様という船の神様が女性なので、女性が乗ると嫉妬するからだといわれている。「船室から一歩も出ないと約束するので」と頼み込んだが、港に停泊する船を見つつかかり尻込みしてしまった。佐藤さんの船は、「沖合底曳き網漁」という漁法で、片道2時間以上かかるポイントまで行き、巨大な網を引きずって魚を獲る。船の後方には、腕の太さほどもあるうかというロープが二巻積み込みである。巻き込まれたら一巻の終わりだ。デッキには網とカゴが所狭しと置かれ、揺れる船の上で身動きを取れるスペースはほとんどない。1月9日の昼、「明日の朝3時に出港する」と連絡が入った。男性カメランだけでも乗船させてもらう予定だったが、年明けに襲来した低気圧の影響が残っているので

危険だと断られてしまった。
午前2時。真っ暗な港の中で、オレンジ色の街灯に照らされた松宝丸は静かに揺れていた。船ではすでに腰の曲がった一人の乗組員が作業をしていた。老人は片足がうまく曲がらないのか、トコトコとゆっくり動いている。2時25分、軽トラが勢いよく滑り込んできた。出てきた佐藤さんは一瞬こちらに目をやり、「おはよう」と短く言っただけで、屋間見る顔とはまったく別人だった。目尻の笑い皺が消え、目はキラリとつり上がっている。普段は饒舌だが、私たちのわからない短い言葉で乗組員に指示を出すだけだ。今日の波の予報は1m、風もビタリと止んでいる。最後の望みをかけてカメランは乗船できる準備をしていたが、とても話しかけられるような雰囲気ではなかった。2時34分、もう一人の乗組員が車に乗って現れた。身のこなしは軽やかだが、帽子からのぞく髪には白髪が混じっている。車やトラック、自転

毎年2月4日、竹竿に吊るした巨大なタラを担いだ船乗りたちが、港から神社までの道のりを練り歩く。彼らを待ち受ける神社では、船頭たちが祈祷を受ける。「掛魚(かけよ)まつり」とよばれるこの奇祭は、300年以上前からここ、金浦(このうら)で行われてきた。奉納したタラは、消防や警察など漁師が海に出て不在の間に家族を守っている人たちに振る舞われる。冬の日本海は荒い。海岸線の松の木はビュビュウと吹き付ける風に耐えるように斜めに這いつくばり、丘の上に立ち並ぶ風車は羽根が飛んでしまいそうなほど回っている。港を臨む小高い山には地蔵様とよばれる3体の石仏が鎮座している。それぞれが風で多数の海難者が出たときの供養として建てられた。手漕ぎの木造船は動力付きの強化プラスチック船へと進化したが、今でもシケがひどい冬には1ヶ月に4回ほどしか出漁できないこともままある。